[特別講演]

礎（いしずえ）としての聖教
―聖典英訳から学んだこと―

本願寺派勧学寮頭　徳永一道

『英訳浄土真宗聖典』の刊行

失礼します。徳永一道と申します。今日は、「礎（いしずえ）としての聖教―聖典英訳から学んだこと―」という講題でお話させていただきます。「聖典英訳から学んだこと」というサブタイトルが付いていますが、私は、本願寺の「国際センター」という海外に対して浄土真宗の教えを伝える機関で、長らく聖典の英訳の事業に携わってきました。海外に浄土真宗の教えを伝えるためにはどうしてもお聖教の外国語訳が必要になってきます。本願寺は明治二十二年にハワイに進出して、その後百年以上をかけて、アメリカ本土、カナダ、そして南米、今はヨーロッパ、オーストラリア、ネパールなどというところまでその開教区・開教地を広げています。

外国に浄土真宗の教えを伝えるには、よくご理解のように日本語では駄目ですね。教えを伝える国で話される言葉をもって伝えなければいけないということになるのは当然です。ところが世界にはいろんな国があって、そして言葉もそれぞれに異なります。しかし、その国に合わせた言葉で親鸞聖人の教えを伝えるということは至難の業

で、はっきり言ってそれは不可能だといってもいいぐらいです。フランスならフランス語で、ドイツならドイツ語で、スウェーデンならスウェーデン語で、あるいはアジアの諸国ならアジアの国の言葉でということになりますが、それだけ多くの言語による翻訳はとてもできないので、便宜的に英語を共通語・国際語と見なして、つまり英語がいちばん世界的に広く使われている言葉だという前提の下で、英語による聖典翻訳の事業がはじまったわけです。そういう聖典の翻訳の事業に着手したのは、浄土真宗の流れを汲む宗派では、私どもの本願寺派が初めてであります。それはなぜかというと、私どもの宗門の歴史には、いちばん最初はハワイ、そして、アメリカとかカナダとか、そうした国々へ、日本の浄土真宗の門徒の人たちがたくさん移民していかれた、そういう人たちの所に開教したという事実があるからです。

例えば、ハワイでしたら広島の門徒の人たちが非常に多かったわけです。特に広島の門徒の方たちを「安芸門徒」と言いますが、ハワイに移民した日本人では安芸門徒が多かったのです。カナダには和歌山から移民していった人たちが多いですね。どちらも浄土真宗の盛んな土地柄でありまして、向こうへ移住していかれた人たちは、どうしてもふるさとのお寺が恋しくなるということで、そういう人たちの要請によって、本願寺がその移住先の国々へ出向いていったというのが開教の始まりです。

最初は、ハワイの場合だったら、広島の安芸門徒の人たちが多いので、広島の人たちが本願寺にお寺をつくってくれと頼んできたし、カナダの場合だったら、和歌山の人たちが多かったそうですから、和歌山の人たちが本願寺にお寺をつくってくれと要請してきたということでしょう。そのようなことをきっかけにして、海外開教が始まったわけです。したがって、日本から移住した方たちとその家族であるいわゆる日系人を対象に開教が行われていましたが、今ではそういうようなところから脱却しまして、非日系人、日系人以外の人たちが親鸞聖人の教えに興味を持って、それで教えを求めるという人たちが増えてきました。そうしますと、そういう特殊な、特殊なというよ

り一地方の日本の出身の人たちだけではなしに、現在は、世界中の人を対象にした教えの説き方をしなければいけないということになります。ところが、言葉というものは世界各国でいろいろ違うんですけども、私どもの宗門にはそのニーズに合わせるだけの能力がまだ足りないという事実があります。そこで英語を世界共通語と見なして、それでお茶を濁しているというような状態です。それでも他の仏教教団よりはずっと進んでいると思いますけれども。

とにかくそういう事情がありまして、英語でもっての開教が中心となっています。ヨーロッパでも英語です。本当はドイツ語やフランス語でも翻訳しなければいけないんですけれども、事実はそれだけの能力がないということです。そこでその英語での伝道のためのお聖教というのが必要になってきます。

本願寺国際センターでは、『英訳浄土真宗聖典』という聖典英訳の仕事をしておりまして、私はその一番最初から関わっています。もう四十五年ぐらいになります。これは英語ですから、アメリカだけかといったらそんなことはないのです。ヨーロッパその他の国々でもこの英訳の聖典で我慢してもらっているということです。英語を世界共通語と見なして、そして、その英語をもって親鸞聖人の教えを伝えるということにしているわけです。

そういう経験から私が得たことを、皆さんに今日はちょっと聞いていただきたいと思います。皆さんのお手元に渡してある資料（12頁）は、われわれが今まで行った、本願寺国際センター『英訳浄土真宗聖典』という出版物の一覧です。

最初に英訳の作業を行ったのは親鸞聖人の著作です。これはもうすでにすべて英語に訳し終えています。その間に蓮如上人の五百回遠忌がありましたので、蓮如上人の『御文章』三十二通を英訳しました。それはエキストラな仕事でしたので、また親鸞聖人の著作の英訳に戻って、親鸞聖人のものが終わりました。その後は親鸞聖人が一番よりどころとされた「浄土三部経」の翻訳にとりかかり、それから七高僧という、親鸞聖人が浄土教の教えの祖師

英文浄土真宗聖典翻訳事業について

Shin Buddhism Translation Series

1974　（昭和49年）準備作業開始
1978　（昭和53年）正式に発足（即如上人伝灯奉告法要を記念して）
Letters of Shinran（英訳『末灯鈔』）
1979　*Notes on 'Essentials of Faith Alone'*（英訳『唯信鈔文意』）
1980　*Notes on 'Once-Calling and Many-Calling'*（英訳『一念多念文意』）
1981　*Notes on the Inscriptions on Sacred Scrolls*（英訳『尊号真像銘文』）
1982　*Passages on the Pure Land Way*（英訳『浄土文類聚鈔』）
1983　*The True Teaching, Practice, and Realization of the Pure Land Way*
Volume I, Chapter on Teaching and Practice（英訳『教行信証』教巻・行巻）
1985　Volume II, Chapter on Shinjin（同、信巻）
1987　Volume III, Chapters on Realization The True Buddha and Land（同、証・真仏土巻）
1990　Volume IV, Chapter on Transformed Buddha-Bodies and Lands（同、化身土巻）
1991　*Hymns of the Pure Land*（英訳『浄土和讃』）
1992　*Hymns of the Pure Land Masters*（英訳『高僧和讃』）
1993　*Hymns of the Dharma-Ages*（英訳『正像末和讃』）
1995　*A Record in Lament of Divergences*（英訳『歎異抄』）

↓

以上の英訳宗祖聖教を合冊して、『浄土三経往生文類』や『如来二種廻向文』・『弥陀如来名号徳』等の宗祖の他の著作の英訳を加えて、

1997　***The Collected Works of Shinran*（英訳親鸞聖人著作集）**刊行
Volume I, The Writings
Volume II, Introductions, Glossaries, and Reading Aids
2000　*Letters of Rennyo*（英訳『御文章』、蓮如上人五百回御遠忌記念←番外）
2002　***The Three Pure Land Sutras*（英訳浄土三部経）**
Volume I, The Amida Sutra and the Contemplation Sutra, 2003（英訳『阿弥陀経』・『観無量寿経』）
Volume II, The Sutra on the Buddha of Immeasurable Life, 2009（英訳『無量寿経』）
2012　**The Pure Land Writings（七高僧著作）**
Volume I, The Indian Masters（龍樹『易行品』・『十二礼』、天親『浄土論』）
Volume II, The Chinese Masters, Part 1.（曇鸞『浄土論註』）

を刊行し、現在はThe Chinese Masters, Part 2.（道綽『安楽集』）の英訳作業中である。

と仰がれた龍樹菩薩から始まって法然聖人に至る七人の高僧方の著作を英語に訳すという仕事に入りました。

現在は中国の道綽禅師の『安楽集』という有名な聖教を翻訳しています。その前の曇鸞大師の『浄土論註』は、もうすでに済みました。これは七年半かかりました。ずいぶん時間がかかりましたけれども、『浄土論註』というのは大部ですし、しかも思想が非常に難しいというのでずいぶんてこずりました。それはすでにもう出版されております。今はその次の七高僧の道綽禅師の『安楽集』という著作の英訳の最中です。

英文翻訳の難しさ

お聖教を英語に訳すのは、縦に書いたものを横に直したらいいだけではないかというと、そうはいかないんです。それはお聖教に限らず、日本語一般に通じて言えることです。

例えば「ありがとう」という言葉は英語にはありません。「ありがとう」は Thank you. ではないかと思われるかもしれませんが、そうではないんです。「ありがとう」というのは、漢字で書くと「有ることが難しい」ですね。あなたが私にしてくださったご親切は有ることが難しい、つまり、その辺に転がっているようなものではない、めったにないほど貴重なものだというので感謝になるのです。「ありがとう」には、「あなたのご親切」という主語が隠されているのです。あなたのご親切は有り難い、有ることが難しい、めったにないというそういう意味ですね。一方で英語の Thank you は、「私はあなたに感謝します」という意味です。英語には、「私は」という主語が隠れているのです。ところが、日本語の「ありがとう」には、「私」はどこにもないのです。すると両者は全然違うではないですか。

それから「さようなら」という英語もありません。皆さんは、「さようなら」を Good-bye だとおっしゃってい

るでしょう。けれども、「さようなら」という英語はありません。「さようなら」は、Good-byeではない。Good-byeというのは、「神さまと一緒に行きなさい」という意味ですよ。ところが「さようなら」もGood-byeも、たまたまお互いがお別れする状況で使うだけのことであって、本来は、英語と日本語とではその意味内容がまったく違うのです。

そういう簡単な日常語でも根本的な違いがあるということから考えますと、仏典を英語に翻訳するということは、これは不可能ですね。それぐらい難しい。全然発想が違うわけですからね。その辺がいちばん苦労するところなのです。翻訳ということに関していちばん大事なことは、ものの考え方が違う、言い換えたら、世界の捉え方が違うということです。それが根本的に違うものですから、言葉を置き換えたところでその違いが出るわけがないのです。

さらに例をあげますと、「向こうに山が見える」という日本語がございます。これも絶対に英語にはなりません。「そんなのは簡単だ。うちでは二年生で教えますよ」というようなことを言った中学校の先生がおられました。その英語の先生は、「I see a mountain over there」と言ったんですが、違います。「向こうに山が見える」という日本語の主語は何ですか。主語は「山」でしょう。そうですね、山が見えるんです。I see a mountainと言った時は、「私」が見るんです。方向が全然違うではないですか。I see a mountainというのは、「私は向こうの山を見ている」という意味です。そうですね。「向こうに山が見える」というこの文章の主語は何でしょうか、主語は「I」ですか。ではないですね。「向こうに山が見える」というときの主語は「山」ですよ。「山が」見えるんです。

「小鳥の声が聞こえる」という文章も、英語では、絶対に翻訳できないものです。英語では「私は小鳥の声を聞いている」としか言えない。「私」というものはないのに、「私」を入れなければ文章にならないということです。そういうことですね。根本的に違うではないですか。

そうしますと、日本語の「向こうに山が見える」にしても「小鳥の声が聞こえる」にしても、これは他力的発想からくる言い方です。「他力」というのはそういうところから発生してくるんです。「私」は要らないんです。山が先にある、小鳥の声が先にある、そういうことですね。私は2番目、あるいはずっともっと後にしか出てこないということで、英語とは発想がまったく違う日本語はもともと他力的な言葉だということです。

そういう発想の仕方がまったく違うということが仏典の英訳をする場合に最も難しいところです。もともと主語がないのに、主語を入れなければ英語にならないという問題が出てくる。これが一番大きな問題なんです。そういう世界の捉え方というものがまったく違うということ、それを英語で表現するのは至難の業であるということなんです。

それは、日本人の発想の仕方と西洋の発想の仕方との違いだと言ってもいい。したがいまして、そういうことを意識しますと、翻訳というのは本来不可能なのです。できないのです。同じように仏典を、英語やフランス語などの西洋語に訳すことはできない。要するに、主語のある文化と主語のない文化の違いという決定的な違いです。その違いを言葉でつないでいくという矛盾がどうしても出てくるということです。

その違いを私は、「自己否定の文化」と「自己主張の文化」の違いだと考えています。日本の文化は、自己否定の文化ですね。日本語には、「I」というものがないんです。「私は」というのはないんです。そうですね。「どこへ行くんですか」、「東京まで」と、これで会話が成り立ちます。英語では絶対に言えないんです。「あなたはどこへ行くんですか」、答えは「私は東京まで行きます」というふうに言わないといけない。ところが日本語はそう言う必要はないのです。「どこへ行くんですか」、「東京まで」と、「私」がなくても、ちゃんと会話が成り立っているという、自己があるかないかという決定的な違いというものが言葉に表れているということです。

一つだけ皆さん方も覚えておいてください。「ありがとう」は Thank you. ではありません。「ありがとう」の主

語は、「あなたのご親切」です。そうですね。これに対してThank youの隠された主語は「I」ですね。「私」です。決定的な違いです。それを何とかつじつまを合わせて仏教で「会通（えつう）」と言いますけど、筋を通しているだけの話であって、意味内容はまったく違うということです。

世界の捉え方の根本的な相違

私は京都女子大学で三十数年、仏教や親鸞聖人の思想を教えました。仏とも法ともわきまえもない学生たちに仏教や親鸞聖人の教えを伝えるのは、これは至難の業なんです。だから、あらゆる手を使ってやらなければいけないというので、いろいろ工夫したわけです。

その一つに、松尾芭蕉の、

よく見れば　薺花咲く　垣根かな

という句と、それと同じような状景を歌ったアルフレッド・テニスンという十九世紀のイギリスの有名な詩人の詩を取り上げて、東洋と西洋の世界の捉え方の違いを説明した鈴木大拙先生の文章を借用したことがあります。テニスンの詩は次のようなものです。それは、

Flower in the crannied wall,
I pluck you out of the crannies;—
Hold you here, root and all, in my hand,
Little flower, but if I could understand
What you are, root and all, and all in all,

I should know what God and man is.

Alfred Tennyson　1809-92

塀の割れ目に咲く花よ
私はおまえを
ここに持っている　根こそぎ私の手の中に持っている
小さい花よ、しかし、もしおまえを理解することができたとしたら
おまえの何であるか、その根こそぎからすべてを
理解することができたとしたら
私にはわかるだろう
神と人間の何であるかが

という詩なのですが、「塀の割れ目に咲く花よ」、ですから、まず花に語りかけることからその状景が察せられます。2行目は「私はおまえを」ですから、その花のことをYouと言っているのです。「おまえを、その割れ目から引き抜いた」と言うんです。それで、「ここに持っている」、手に持っていると言う、根こそぎ持っていると書いています。root and allと、「根こそぎ私の手の中に持っている」と。塀の割れ目に花が咲いている、それをこのテニスンは引き抜いて手に持っているわけです。

そして、その花にいとおしげに語りかけているのです。「小さい花よ、しかし、もし自分がおまえを理解することができたとしたら、おまえの何であるかを」と、4行目がそうです。5行目もそうです。「根こそぎを全てを理解することができたとしたら、私は知るであろう」と。何を知るかと、「神と人間の何であるかを」と、神と人間の関係が分かるだろうと言っているんです。

ずいぶん理屈っぽいですね、どうですか。小さい花に世界というものを見ようとしている。神と人間との関係というものを見ようとしている。これがテニスンの詩です。芭蕉の場合は、「よく見れば　薺花咲く　垣根かな」と言って、これだけです。両者ともに同じような状況を歌っている、そういう詩なんですが、発想がまったく違いますね。芭蕉は「よく見れば　薺花咲く　垣根かな」とだけいっているのですが、これの主語は薺です。いわゆるぺんぺん草ですね。ぺんぺん草が咲いているという、ただそれだけの状況をうたったものです。

一方、テニスンの詩はいろいろ分析しています。小さい花を見て。世界の何たるかが分かるという、ここまで分析してしまう。この両者の決定的な違いがお分かりでしょうか。これは私が見つけ出した例ではなくて、鈴木大拙先生が用いられた例であって、それを借用しているだけなんです。この、「よく見れば　薺花咲く　垣根かな」と、それから、次のテニスンの詩と比べてご覧になったら、世界の捉え方というのがまったく違うということです。言ってみれば、これは東洋と西洋の世界観の違いだということでしょう。

この東洋的なものの見方、すなわち世界の捉え方が、浄土真宗の教えにもちゃんと反映しているということ、それを今日は分かっていただきたくて、この二つの詩の比較を前提としてお話ししているということです。浄土真宗の「他力」というのは、そういう基盤の上に成立するのです。「私」が先に立ったら「他力」は成立しない。言い代えれば、「私」が中心になれば阿弥陀さまは隠れてしまうんだということ、そういうことですね。こういう大きな違いがあるということです。

「向こうに山が見える」という、これは日本語ではごく普通の言い方です。「小鳥の声が聞こえる、小鳥のさえずりが聞こえる」というのもごく普通の日本語で、これを英語に訳せば、先に言ったような英語になります。ごく簡単な英語ですね。しかし、この両者はまったく違うんです。中学校の英語ではこの両者が同じだと言っても合格でしょう。だけど、私から言わせればそれは「訳」ではないのです。

そうしたらどう訳すのか。これは「訳せません」としか言いようがない。「向こうに山が見える」という日本語は、絶対に英語には訳せませんということです。見ているのは私なのに、主語は「山」でしょう。皆さんどうですか、「向こうに山が見える」というのは、山が見えるんです。そうしたら主語が「山」です。「小鳥のさえずり」というのは、「小鳥のさえずり」が主語であって、「聞こえる」はその動詞ですが、聞いているのは小鳥ではなくて「私」ですから、英語に訳すと「I」がどうしても出てくるのです。

ところが、元の日本語には、まったく「I」がないではないですか。ないのに「I」を入れなければ英語には訳せないという、そういう決定的な違いというものがあるということです。われわれは今、西洋文化というもの、西洋的発想というものにもう慣れ切ってしまって、なんの疑問も感じないのですけれども。実を言うとそこに根本的な、決定的な違いがあるということを、今日はお分かり願いたいと思っているのです。

そういうことを前提としないと、親鸞聖人の救いの理念というのは明らかにならない。他力の救いというのは分からないんです。「私」というものがあったら、他力の救いというものは成立しないということなんです。そういうことをお分かりいただきたくて、これを書いたわけです。「私」というものは二の次であって「世界」が先であるということです。

如実知見

次に「如実知見」ということについて、ある有名な仏教学者の先生、鈴木大拙先生のことなんですけど、「仏教を一言で言ったらなんですか」と問われたときに、その先生は、「如実知見だ」とおっしゃったそうです。

私が大変尊敬していた先生に、長尾雅人という京都大学の仏教学の教授をなさった先生がおられます。長尾先生

も仏教を一言で言えば、「如実知見だ」とおっしゃいました。鈴木先生と同じことをおっしゃったのです。「如実知見」というのは、ものをあるがままに見るということです。それはもののあるがままのところに真実がある、究極的なものがあるということです。何か特殊なところにあるわけではない、現実から懸け離れたところにあるわけではないというわけです。もののあるがまま、それが真実であるという、これは仏教に一貫したものの見方なんです。それは、先ほど言いましたが、「向こうに山が見える」と同じことですよ。山が「見える」というこの事実そのものが、これが究極的な事実であって、それに何も付け加える必要はない。「私は見ている」と、「私」を付け加える必要はない。そうですね。「山が見える」、これは「山」が主語であって、その見えている相（すがた）そのものが究極的なありようであるということで、何も付け加える必要はない、何も差し引く必要もないということです。仏教の究極的な真理というのは、そういうところに成立するということを、ぜひともお分かりいただきたい。

親鸞聖人の救いも同じことです。親鸞聖人の救いは、「そのままの救い」といわれます。阿弥陀さまは、「そのままでいい」とおっしゃる。だから私は「このまま」でいいんです。そういうことですね。阿弥陀さまは、「そのままでいい、そのまま来なさい」とおっしゃる。それが南無阿弥陀仏のすがたです。

ところがわれわれは、「ああ、そうですか、このままですね」と念を押したくなる、これが問題なのです。お分かりでしょうか、私の言っていることが。阿弥陀さまは「そのままでいい」と言われる。それならもうそこに何かを加える必要はない、阿弥陀さまに念を押す必要もないというのが浄土真宗の救いということでしょう。そこにあれこれと理屈を付け加える必要はないということです。

道元禅師にもこのような発想にもとづいた有名な言葉があります。それは、

而今の山水は、古仏の道現成なり。ともに法位に住して、究尽の功徳を成ぜり。古仏いはく、山是山、水是水。この道取は山は是れ山といふにあらず、山は是れ山といふなり。（大正新脩大蔵経八十二巻、62・66頁）

冒頭の「而今の山水は、古仏の道現成なり」の「古仏」というのは本当のブッダということです。山や川はほんとうのほとけさまの悟りの現れであるという。「ともに法位に住して、究尽の功徳を成ぜり」というのは、山や川はもう究極の悟りの位に達していて、尽きせぬ功徳を持っている。山や川はそのあるがままで、それが仏の功徳となるということです。

「古仏いはく」の「古仏」というのは、永遠のほとけと言った方がいいかもしれないですね。次の「山は是れ山、水は是れ水」は、「山はそのままで山だ、水はそのままで水だ」ということですが、水というのは川のことですから、「川はそのままで川だ」というのです。「この道取は」というのは、「この言葉の意味は」ということで、「山は是れ山といふにあらず、山は是れ山といふなり」と言っているのです。皆さんこれはお分かりでしょうか。まさしくいわゆる禅問答ですね。先に「山は山だ、川は川だ」と言い、それは「あんたがあれは山だと言ったから山になったわけではない」と言っているということですね。それが「山は是れ山といふにあらず」ということです。「山は是れ山といふなり」というのは「山はもともと山なんだ、あんたが山というより前に山なんだ」ということで、これは人間の計らいというものを一切否定したところに、実在というものがあるということを言っているのでしょう。

理屈を加えて山が山になるわけではないという、そういうことですね。それは、山も川も悟りの現れなんだということでしょう。「古仏の道」、「道」というのは悟りです。山も川も悟りが現れた姿であるという。われわれはそれに何か付け加えたくてしようがない。山を見たら、あの山はどう登ったらいいだろうかとか、あれを開発したらどれだけの価格で売れるだろうかとか、そんなことばかり考えますね。

そういうことではない。山は山のあるがままで、これで行き着いているんだという。もうすでに到達している。これは裏からいえば、人間の計らいということを否定しているわけです。人間というのは、あれこれ、ごちゃごち

ゃと理屈ばかり付けて、山を見たらその山を自分の中に取り込んで、いろんな意味を付けようとする。しかし、「あんたが意味付けする以前からあれは山なんだ」ということを言っているわけです。これが道元禅師のおっしゃりたいところだろうと私は思います。

次の言葉は、一遍上人のものです。一遍上人という方は親鸞聖人から少し遅れますが、時代がちょっと重なりますね。二十年ほど重なります。親鸞聖人の晩年に生まれたお方であって、同じように浄土教の教えを展開した、そういうお方です。フルネームは一遍智真と言いますが、この間、京都国立博物館で「一遍展」がありました。私は何度も見に行きましたけど、実に一遍という人はすごいお方ですね。この一遍上人は南無阿弥陀仏の念仏を究極のものとしたお方ですから、ある意味で親鸞聖人に通じるところがあります。それは他力念仏の系譜に入るということです。

その一遍上人に、「よろづ生きとし生けるもの、山河草木、ふく風たつ浪の音までも、念仏ならずといふことなし」（大乗仏典21、法然・一遍、中央公論社181頁）という言葉があります。「生きとし生けるもの、山河草木、ふく風たつ浪の音」、もう説明は要らないですね。この世界に起こる一切の現象、一切の出来事、あるいは一切のものが、「念仏ならずといふことなし」、つまりすべてほとけさまの声だと言っているわけです。そういう究極的なものの現れだと。そこに人間の計らいとか計算を付け加える必要はないという、そういうことですね。

そのいちばん極めつけとして私がいつも京都女子大学で学生たちに説明した、一つの例なんですけど、「荘子」の「応帝王篇」という書物に分かりやすい例があります。荘子という方は皆さんご存じですね。中国の有名な思想家です。老荘思想の究極にある人です。老子、荘子という、老荘思想でありながら同時に非常に仏教に近いお方です。

その老子の「応帝王篇」に分かりやすい例が書いてあります。

南海の帝を儵と為し
北海の帝を忽と為し
中央の帝を渾沌と為す
儵と忽と、時に相与に渾沌の地に遇う
渾沌これを待つこと甚だ善し
儵と忽と、渾沌の徳に報いんことを謀りて曰く
人皆七竅有り、以て視聴食息す
此れ独り有ること無し
こころみに之を鑿たん
日に一竅を鑿つ
七日にして渾沌死す

「南海の帝を儵と為し」、南の海にいる帝王を儵と呼ぶ。「北海の帝を忽と為し」、北海の帝王を忽と呼ぶということです。「中央の帝を混沌と為す」、南と北の海に挟まれた真ん中の海の帝王を、渾沌と名付けようというわけです。「儵と忽と、時に相与に渾沌の地に遇う」。たまたま儵と忽という南海の帝王と北海の帝王が、真ん中の渾沌という帝王の国で出遇ったというんですね。

「渾沌これを待つこと甚だ善し」、待つというのは歓待するという意味です。渾沌という真ん中の帝王は、この二人の帝王、儵と忽を歓迎し歓待した。「甚だ善し」というのだから、ずいぶん歓迎したわけです。「よく来た」と言うわけですね。「儵と忽と、渾沌の徳に報いんことを謀りて曰く」、この南海の帝王と北海の帝王である儵と忽は、その真ん中の渾沌という帝王に親切にしてもらったので、その親切にお返ししなければいけない、それで「謀りて

曰く」、二人で相談したというんです。

「人皆七竅有り、以て視聴食息す」、人間はみんな七つのくぼみを持っている。竅というのはくぼみ、穴のことです。七つのくぼみを持っている。それをもって見たり食べたり、見たり聞いたり、あるいは食べたり息をしたりしているというわけです。顔に七つの穴がある、そのことを言っているわけです。

「此れ独り有ること無し」、「此れ」というは渾沌のことです。真ん中の帝王の渾沌だけは顔がなかったんです。要するに目鼻がなかったんです。のっぺらぼうだったんですね。渾沌、「此れ独り有ること無し」、儵と忽はちゃんと七つの目鼻を持っているのに、渾沌だけはのっぺらぼうの顔をしていたと。

それで、歓待してくれたお礼に、「こころみに之を鑿たん」、親切にしてくれたから、お礼として二人で混沌に目鼻を付けてやろうと。「日に一竅を鑿つ」、それで一日に一つの穴を付ける、右の目から、左の目、鼻から、口からというふうに。そして、「七日にして渾沌死す」と。七つがそろった、顔の造作がそろったときに渾沌が死んでしまったという話です。

これは何を言っているんでしょうね。「余計なはからいをするな」ということですね。この儵と忽はご恩返しとして余計なことをして、せっかくの渾沌が死んでしまったという、そういう荘子の見事な例えです。

そのままの救い

時間がもうほとんどなくなってきましたが、もう少しだけお話しさせていただきましょう。

今言いましたように、もののあるがままのところに究極の実在がある。究極のものがあるということです。またそういうことを、親鸞聖人の教えである浄土真宗にもちゃんと適用することができるということです。仏教である

限り、大乗仏教である限り、全てこの真理が貫いていると。親鸞聖人の教えもまったく同じことである。

要するに、あるがままのところに究極のものがあるという。親鸞聖人の教えを聴聞なさった方は、「そのままの救い」ということをおっしゃるでしょう。皆さんお聞きになったでしょう。これはもう浄土真宗の法義の一番中心を表す言葉です。「そのままの救い」。阿弥陀さまは、「そのままでいい」とおっしゃる。阿弥陀さまのお慈悲というのには、もうちょっと聴聞してから、あるいはもうちょっとお念仏が喜べるようになってから救ってやるという、そういう条件はありません。

聴聞に身が入らないなら入らないままで、念仏が喜べないなら喜べないままで、阿弥陀さまのお慈悲の中にあるというのが、親鸞聖人が明らかにしてくださった阿弥陀の大悲ですね。そうですね。もうちょっとあの先生のお話が分かるようにならなければと思うようなことは余計なことです。『教行信証』が分かるようにならないと、和讃をありがたく思うようにならなければと、いろいろと計らいますが、そういう一切の条件は要らないのです。

あるがままの、今のままの私が阿弥陀さまのお慈悲の中にある、そういうことですね。これが親鸞聖人の教えの究極でしょう。だから、「そのままでいい」という阿弥陀さまのお慈悲を言い換えたら、「そのまま来なさい」と、そのままでいいということです。私はこのままでいいんです。

ところがわれわれはこのままでは気が済まない、もうちょっとお念仏が喜べるようになってからとか、もう少しお説教がよく分かるように、理解できるようになってからというような条件ばかりを勝手につくって、それで、このままの私でものを見ようとしないということです。それを打破するというのが、浄土真宗の法義というものです。

このままの私はこのままでいい、阿弥陀さまが「そのままでいい」とおっしゃったら、私はこのままでいいんです。お念仏が喜べないなら喜べないままでいい。教義が理解できないなら理解できないままでいいという、それが阿弥陀さまの大悲の救いであるということです。もう少し点を稼がないとあなたは合格しませんと、そういうこと

はないということです。だから、私は「このままで」阿弥陀さまのお慈悲に救われるような、そういう存在であるということでしょう。

このままでいい、それが普通は皆さん方お聞きにならないですけど、阿弥陀さまの本願は四十八願と言いますね。普通はお説教ではめったに出さない例ですけど、第三番目の願に、「設ひ我れ仏を得たらんに、国中の人天、悉く真金色ならずは、正覚を取らじ」という誓願があります。あらゆる存在が金色に光り輝いていないならば、私は悟りを開かない。よく言えば、あらゆる人が金色に輝いているという意味です。これは、まさにそのままの救いということを誓った本願です。

あなたは今金色に輝いていないから、金色に輝くように努力しなさいという意味ではありません。われわれのありのままが、金色に輝くほど尊い存在であると見てくださるものがあるということです。

その次は、第四願ですけど。「設ひ我れ仏を得たらんに、国中の人天、形色不同にして、好醜有らば、正覚を取らじ」、私の国にいる人たちが形色不同、つまり姿形がふぞろいで、美しいとか醜いというようなことがあったら、私は悟りを開かない。だから、みんなそれぞれに尊いということを言っているわけです。そういうことですね。

皆さん方は、阿弥陀さまの本願といえば第十八願をすぐに出されるんですけど。第十八願を出すまでに、この第三番目の願、第四番目の願に注目していただきたい。ごく当たり前のことをおっしゃっておりますけど、これほどありがたい願はないですね。言い換えたら、私の「このまま」が、このままがそのままでいいという、そういう本願に救われていくということです。

もう少し理解力がつかなければ、もう少しお聖教を読まなければ、もう少しお念仏が素直に口から出るようにならなければ、そんなことは一切関係ないのです。「念仏が喜べないなら喜べないそのままで」ということです。お聖教が分からないなら分からないままで、阿弥陀さまのお慈悲の中にあるということを誓ったのが、この本願だと

いうことでしょう。

親鸞聖人の教えは、まさにこういう教えなのです。親鸞聖人の教えは「そのままの救い」といいます。阿弥陀さまは、「そのままでいい」とおっしゃっている。そうしたら、私は「このままでいい」わけです。このままで救われていくということなのです。

ところが、そういうことを英語で解説するということは至難の業なのです。西洋人の発想というのは、今の私が今の私ではなくなって救われるというのが救いだと思っているので、今の私より上等な別の存在になっていく、それで初めて救いが成立するということになってしまうのです。西洋人のみならず、日本人でもそうでしょうけど、「もう少しお念仏が喜べるようにならなければ」、みたいに勝手に自分で救いに条件を付けてしまいます。あるいは、「もう少しご法義が分かるようにならなければ救われない」というように、自分で勝手に足かせをつくっているのです。

阿弥陀さまは「そのままでいい」とおっしゃっている。そうしたら、私は「このままでいい」と。お念仏が喜べないなら喜べないままで、ご法義が理解できないなら理解できないままで、阿弥陀さまのお慈悲の中にあるという、そこを聞くというのが聴聞ということなんです。ところがこういう発想が伝統的に西洋には見られないという事実があって、聖典の英訳を通して常に感じることは「隔靴掻痒」の思いであることは否定できません。これはまあ現代の日本においても同様だと言わざるを得ませんが。

そういうことで、「そのままでいい」という救いのはたらきによって、「このままの私」が救われるということを、英語で表現することがいかに難しいかということをお話しして、私のお話を終わらせていただきたいと思います。

※本稿は、二〇一九年九月四日に開催された浄土真宗本願寺派総合研究所主催『浄土真宗聖典全書』全6巻刊行記念講演会・シンポジウム「親鸞聖人　ことばの織りなす力」での講演をまとめたものです。